

濱口先生の講話

～昨年度の生活発表会時の講話より～

● 「見る・聞く・考える」力が弱くなってきている子どもたち ～子どもたちと向き合う機会を増やしましょう～

おはようございます。体操教室を担当させていただいております「一般社団法人スポーツ工房クオラ」の濱口です。

今日はゆり組さんの（体操の）発表の前に少しお話をする時間をいただきました。私どもの団体は、県内のいろいろな保育園・幼稚園の方で体育指導を行っています。その活動を通して、たくさん子どもたちと対応している中で、最近の子どもたちについて気になることを感じたところがありますのでこの場をお借りして少しお話しさせていただきたいと思います。

ここ数年ですごく情報科社会化が進んで、その影響もあるのかなと思うのですが、（最近の子どもたちには）「見る・聞く・考える」という力がすごく弱くなっているのではと思います。原因は何かと考えてみると、一つには親の方が、例えば子どもが家に帰ってから「今日こんなことがあったよ！」などと話しかけてきたときに、（子を持つ私にもそうした傾向はあるのですが）スマホをいじりながら「ああ、そうなの？」というような「ながら聞き」をするという場面がままあると思うのですが、やはりそうしたことを親がやってみせると、子どもたちにもだんだん「聞く姿勢」が育たなくなるのではと感じます。昔だったら（お父さんお母さんも当時を考えていただけると覚えがおありと思うのですが）ご飯を食べながらテレビを見ていると「あんた！何でテレビばかりポーツと見よっとね！ごはん粒が口に付いとるたい！テレビば消すぞ！」といった形で、お父さん・お母さんからテレビを消されて「ドラえもん見たかったのになあ～」などと後悔した経験等があったと思います。ですが今はテレビを家族みんなで見るでもなく、お父さん・お母さん方がスマホを見ながらご飯を食べたりするようになってきています。それで子どもはテレビだけに注意を奪われ、会話もなく、没頭しながらご飯を食べている。そういったことを誰も注意しなくなっているような状況が多いと感じます。やはりこうした生活習慣の変遷に伴って、子どもたちが注目しながら自分の耳で「聞く」とか目で「見る」ということがちょっとずつ減ってきているのかな？と感じています。



ここ数年ですごく情報科社会化が進んで、その影響もあるのかなと思うのですが、（最近の子どもたちには）「見る・聞く・考える」という力がすごく弱くなっているのではと思います。原因は何かと考えてみると、一つには親の方が、例えば子どもが家に帰ってから「今日こんなことがあったよ！」などと話しかけてきたときに、（子を持つ私にもそうした傾向はあるのですが）スマホをいじりながら「ああ、そうなの？」というような「ながら聞き」をするという場面がままあると思うのですが、やはりそうしたことを親がやってみせると、子どもたちにもだんだん「聞く姿勢」が育たなくなるのではと感じます。昔だったら（お父さんお母さんも当時を考えていただけると覚えがおありと思うのですが）ご飯を食べながらテレビを見ていると「あんた！何でテレビばかりポーツと見よっとね！ごはん粒が口に付いとるたい！テレビば消すぞ！」といった形で、お父さん・お母さんからテレビを消されて「ドラえもん見たかったのになあ～」などと後悔した経験等があったと思います。ですが今はテレビを家族みんなで見るでもなく、お父さん・お母さん方がスマホを見ながらご飯を食べたりするようになってきています。それで子どもはテレビだけに注意を奪われ、会話もなく、没頭しながらご飯を食べている。そういったことを誰も注意しなくなっているような状況が多いと感じます。やはりこうした生活習慣の変遷に伴って、子どもたちが注目しながら自分の耳で「聞く」とか目で「見る」ということがちょっとずつ減ってきているのかな？と感じています。

スマホは便利です。とても楽しいですが、そうしたところを保護者の方が少し考えられて、（子どもが語りかけてきたときには）スマホをちょっと置いて「ん？なに？今日何があったの？」といった「聞く」ということの大切さや、子どもの言葉に耳を傾け共感してあげることがとても大切なのではないかなと思います。まあスマホをしながら

でも「聞いている」とは思うのですが、やはりその部分では、子どもというのは「感受性」の塊でもあるので、そうしたときに（単に相づちをするだけではなく）「わあっ～そんなことがあったの？良かったねえ～！」「ああっ～それはいかんだったねえ～」などと、お母さん・お父さんの表情を見てですね、やはり子どもというのは心が豊かになってくるんだと思います。保護者の方が表情を変えずにスマホばかりを見て返事をする・・・そうした



た様子を子どもが見るような状況は何か違うかなと感じます。

そういったことも含めて、社会が便利になってきた反面、ここ最近子どもと一緒に10分以上どこかへ出かけたという方いらっしゃいますか？（挙手が多く）ああすごいですね～！やはりここもですね、自動車が各家庭に配備されて便利になってきていますが、私もそうなのですが、歩いて5分くらい近くのスーパーやコンビニへ行くにも車を使ってしまうことがままあります。やはりですね人間にとって、そして成長期の子どものために「歩く」ということは体力

の基礎的な部分だと思うのですが、そう考えたときに、近くへ出かけるにも子どもを乗せて車で行ってしまうということになると、やっぱり「歩く力」というものが育たず、「体力の低下」につながると思います。歩いて行ける場所であれば、車ではなくて大人も一緒に歩く機会を持ちながら、道路を歩くことによって「歩道からはみ出たら危ないよ」とか「歩くとき、白い線をはみ出ると危ないよ」などと危険を察知したり回避したりという場面が出てくると思うのです。おそらく幼児でも1キロくらいは歩けると思うのですが、そうしたちょっとしたことから体力低下を防ぐことができるのではないかと思います。

● 「自立心」を育むためには時に「見守る」姿勢も大切

～「過保護」な状況を見直してみましよう！～

また、時折見かけるのですが、登下校の時、子どものカバンやバッグとかを親が持ってあげるということがあります。子どもは手ぶらで登下校するような場面も見られます。（保護者の方にも急がれる諸事情があると思うのですが）やはりここでも「自分のものは自分で持つ」とか「自分のことは自分でする」といった「自立心」を子どもに身につけさせる意味でも、子どもができることは、できるだけ自分でさせるようなことも必要かなと思います。子ども側からしたら「自分が何もしなかったら、親が、他人がしてくれるんだ」という気持ちや姿勢が芽生えてくるのではないかと危惧しています。やはり子どもの自立心を芽生えさせたり、生きていくための力を身につけさせる意味でも、そこは少し「待つ」あげて、子どもの行動を見守る必要があるのではないかなと思います。忙しいのは分かるのですが、親が手をかけてしまうと、（私たちもそうなのですが）子どもはやっぱり楽な方が良く考えるのではと思います。そうした面を一つひとつお家の大人の方が少しでも考えていただくと、子どもの「自立心」というものを養っていけるのかなと思います。

現代社会の中では、やはりどうしても子どもたちに対して「過保護」になっている場面があると思います。一つの例として、例えば最近の子どもたちは外で遊ぶことが少なくなってきました。また、折角公園などで遊んでいたとしても、その様子などを見ていると、子どもが高いところから飛び降りようとする、すぐに手をかけてやめさせようとする親が多くなったなど感じる場合があります。男の子というのは単純なので、結構高いところから飛び降りたがるんですね。でも、あまりにも高いところから飛び降りようとするので、お父さんお



母さんたちは思わず「ヤメテー！」と止められるんですね。これが女の子の場合だったら、低いところから跳んで大丈夫だったから、次は少し高いところから跳んでみようとする場合が多いので、親の方も安心して見ていられるのですが、男の子はいきなり高いところに行くので、そうした心配から止められるのだとは思っています。

これは私の恩師から聞いた言葉なのですが、「親」という漢字を思い浮かべてください。「親」という漢字は「木の上に立って見る」という字でできているんですね。やはりこの意味というものは、子どもを「見守る」存在というところから来ていると思うんですね。確かに手をかける部分も必要だとは思いますが、あまりにも「過保護」になってしまうと、子どもの成長に悪い影響を与えていくこともあるのかなと思います。今の時代は外遊びの機会や兄弟なども少なくなって、子どもを取り巻く環境というものが昔と比べて大きく変わってきているんですね。じゃあ変わってきたからどうしたら良いのかと考えた時に、やはりそこ5分でも良いので、保護者の方が子どもたちを外で（機会がなかなか取れないときにはせめてお家の中ででも）遊ばせてやる機会を作られる姿勢が大切かなと思います。例えば百均（ヒャクキン）などに柔らかいボールなども売ってありますが、そうしたものを用意して子どもとキャッチボールをしたりなど、ちょっとしたことから始めていけば、少しずつでも（今まで話したコミュニケーション・自立心・体力の低下等の課題について）改善するのかなと思います。

● 「壁」にぶつかることから身につく力もある

～周囲の大人たちが、子どもの気持ちに寄り添いながら～

今の子どもたちを見ていると、体力のある子と体力のない子の「二極化」がすすんでいるんですね。そしてできる子とできない子の間の「中間層」という子がほぼほぼいない状態のように感じます。では「できる子」はどうしてできるのかと言えば、やはりスポーツ教室のような習い事に行っている機会が多く、できない子のところはそういった意識が低いように感じます。だからと言って、週に5日も6日も運動しろと言っているわけでは決してありません。ただちょっとしたところから「体を動かす」といったことに意識を変え

ていかないと、外遊びやそれに伴ういろいろな体験などが存分にできた昔とは違って、「子どもというのは放っておいても勝手に運動できるようになる。成長できるんだ。」という考え方は、最近の社会情勢の中ではなかなか難しくなっているように思います。なので、お父さんお母さん、周囲の大人たちが、そうした部分を意識して時間を作ってあげることができないと、子どもたちがかわいそうかなと思います。

子どもというのは、もともと体を動かすことがとても好きだと思います。そしてお父さんお母さんのことがとても好きだと思います。なのでお父さんお母さんと「遊ぶ」ということが子どもにとってとても楽しいと思いますので、運動が好きとか嫌いとか、スポーツができるできないとかではなく、お父さんお母さんと楽しい時間を過ごせば、多分体を動かすということは「楽しいこと」だなという気持ちや生活の中のいろいろな局面でのモチベーションが、子どもの中に蓄積されていくのではないかと思います。

この体操教室でもいろいろなことをやっていますが、その中で子どもたちが「友達ができるのに、上手にできない」など「壁」にぶつかることがあるんですね。ただ、そこは単に「できる・できない」ということではなく、「一生懸命頑張ること」自体が一番大事だと思うんですね。子どもが「嫌だな」とか「やりたくない」と思う気持ちを乗り越えた時こそ達成感を感じて、引いては成長につながると思います。体操教室でいろいろやっていることというのは、基本的にみんなができることをやっていて、私も一人ひとりに合わせてやっているつもりですが、それでも「鉄棒ができない」とか「縄跳びができない」などと、子どもたちがお家で言われることもあるかと思います。そういうことがあった場合には、是非ともお父さんお母さんが「そうなのお～？」などと聞き入れてあげて、「でも、



頑張ってみたらどうかなー」という具合に促してあげていただくと、子どもの方もまたやる気になれるのではないかなと思います。そのような場面で「じゃあ、やらなくて良いよ」ということになってしまうと、これから小学校、中学校、高校に進学していく中で、達成感というか、チャレンジしたことの体験がないまま育って行ってしまうのではないかなと危惧しています。先ほど言いましたように「できる、できない」ではなくて、そこの「頑張り」という部分が一番大事なかなと思います。

●子どもたちのポジティブな姿勢を育むために我々ができること

～チャレンジする気持ちが将来の可能性を切り開く～

ですので、体操教室に限らずにですね、例えばお家の中でお手伝いなど良いことをしたら、「ありがとうね！」などとそういう言葉をかけてあげることができれば、子どもたちはお父さんお母さんが大好きなので、喜んでいろいろなことに前向きに頑張っていくようになると思います。お父さんお母さん方が子どもたちを認めてあげて、例えばテストの成

績が悪かったときにでも「次は頑張ろうね！」とか「何が悪かったのかな？」とか「じゃ一緒に勉強しようか！」などと「一緒になって考えてあげる、やっていく」という姿勢を、対応しながら見せていくことは、子どもの大きな成長につながると思います。

少し長くなったのですが、いろいろなことにおいて子どもたちというのは無限の可能性を持っていると思います。なので「できる・できない」という尺度だけではなくて、お父さんお母さんが一丸となって子どもたちを応援してあげることも、彼らがいるいろいろなことにチャレンジしていきける自信につながると思います。チャレンジする



ということはとても大切だと思います。子どもたちにも「お父さんお母さんたちのお仕事知っているかな？」聞くと「知ってる」と答えるのですが、じゃあ子どもたちの仕事は何かな？と聞くと「うーん？」と悩むんですね。私は子どもたちの仕事は「一回間違えること」だと思います。その間違いの中から、どうやってその間違いを正解にするのか？そしてその正解というものにしてもいろいろな道筋があると思うのです。なので、子どもたちというのは「間違えるもの」そして「間違えて、その中で覚えるもの」だと思いますので、いろいろ失敗させて、その失敗を認めさせてあげてください。そうでないと、小学生とかにも見られるのですが、「ボクこれできないからやらない！」などといった、何に対してもネガティブな子どもたちというのは結構多いんですね。なので「できなくても、頑張れば大丈夫だよ！」という形で声かけをしてあげればいいかなと思います。子どもたちに「いろいろな失敗しても次があるよ」と何回も何回も声かけして励まして、達成感を持たせてあげるような働きかけをしていけば子どもの持つ可能性がさらに広がり、大きな成長につながると思います。

